

大学生の未来の明るさと未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度との関連

—学年による変化の視点から—

日潟 淳子

要旨

本研究では他国に比べて日本の青年が未来に希望を持ってない状況にあることが示唆されていることから、大学生が未来を明るいと判断する要因を未来の視野の広がりや人生に対する積極的態度の2側面から学年別にとらえ、キャリア形成における支援を検討した。1年生は未来の視野の広がりや直接的に未来の明るさに関係せず、人生に対する積極的態度の目標や夢、期待、向上心があることによって未来の明るさを判断していることが示された。2年生では未来の視野の広がりとして、社会貢献の視点や自己実現、他者とのつながりの視点が未来の明るさを直接的に予測する要因となることが示唆された。しかし、実際の人生に対する積極的態度は他学年に比べて未来の明るさとの関連があまりみられなかった。3年生は未来の視野の広がりや2年生と同様の傾向がみられたが、さらに、人生に対する積極的態度が生じているか否かが未来の明るさの判断に関連することが示された。これらの結果から、1年生には社会的な側面の視野の広がりを促すかわり、2年生には自己と社会の接続、3年生には自己と社会の統合への支援が未来の明るさを生じさせる可能性が示唆された。

キーワード：未来展望、時間的展望、人生積極的態度、キャリア形成、大学生

1. 問題と目的

青年期にポジティブな時間的展望を持つことと、青年期の発達課題への取り組みに正の相関があることがさまざまな研究で示されている。時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1942/1954)」とされ、過去や未来への見通しであり、それを踏まえて現在をどのように過ごすかという個人の態度としてとらえることもできる。青年期には社会人になる準備段階として、現実的な自分の人生に対する見通しを立てることが求められる。

しかしながら、内閣府少年企画 (2013) が行った「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では、日本の青少年は他国よりも著しく将来を明るいととらえる割合が低いことが示されている。また、リクルートキャリア就職みらい研究所 (2016) が行った大学生の将来イメージの調査においては、社会人になるころの社会の明るさについては「明るい」と答えた者の割合は26.9%で、「明るくない」と答える者の割合は31.5%であった。自分自身の将来の明るさについては「明るい」と答えた者は41.7%で、「明るくない」と答えた者は23.8%であった。また、卒業後の進路を考えるときの気持ちにおいては、「楽しい」と答えた者は24.2%であり、「不安」と答えた者は57.1%であった。4年前の同調査 (リクルートキャリア就職みらい研究所, 2013) よりもポジティブな回答をした者の割合は増えているが、前述した他国の青少年への調査では自分の将来が明るいと答えた者の割合は約80-90%であり、かなりの意識の違いがみられている。

このような状況を踏まえ、日潟 (2014) は日本の大学生が何を判断材料として、自分の未来が明るい、あるいは、明るくないと答えているのかを自由記述によってとらえた。その結果、未来の展望をポジティブに評価する要因には、従来の青年期の特徴とされる目標や夢が決まっているからとする者が一番多く、ネガティブな要因には、目標や夢が未確定であるからとする者が最も多かった。それ以外にポジティブにとらえる要因としては、内的統制感や自己効力

感、ポジティブ志向や「明るくあってほしい」という期待や願望、「なんとなく」とする直観的楽観視、人との出会いなどが見られ、ネガティブにとらえる要因としては、現代の大学生の特徴であると考えられる、社会情勢不安、対人スキルの未熟さなどがあることが明らかとなった。

日潟 (2014) において、大学生が未来の明るさを判断する上で、目標や夢の有無が大きな影響を与えることが示されたことから、現実的な視点に立ち、自分のキャリアを形成していくことが求められる大学生がどのような視点で目標や夢を設定していくのかをとらえる必要があると考えられた。半澤・坂井 (2005) は大学生の現在の学業と職業とのつながりを意識しているか否かを接続意識とし、大学適応との関連をとらえている。その結果、接続を意識している大学生は、現実と理想とのズレが生じた場合に将来の目標を失ってしまうにもかかわらず、新たな目標を渴望しない状況が生じていることが示唆されている。学業と職業への意識を接続するためには、未来の自己に関して、さまざまな側面からとらえることが必要であり、それにより未来展望が柔軟に修正され得るとも考えられ、それが行われないことによって目標や夢が設定できず、未来の明るさが影響を受けていることが予測される。例えば、「あなたの将来は明るいですか？」と問われた時に、被検者があこがれの職業に就くという視点のみで答えているとすれば、なれそうになれば「暗い」と答えると予測できる。しかし、なりたい者にはなれないかもしれないが、何らかの形で社会貢献をすることや人間として成長することなどを将来の目標としてとらえている者はネガティブな反応はしないであろう。大学生が自己の1つの目標の達成のみではなく、社会貢献の視点や自己成長など、幅広い視点をもって多面的に自己の未来を評価し、未来を見通すことができれば、未来に対するとらえ方はポジティブになると予測され、未来に対する感情もポジティブなものになると考えられる。

しかしながら、従来の時間的展望研究における未来の展望をとらえる手法としては、どれくらい先のことを考えているのかをとら

え、遠くのことを予測している者は未来の広がりがあるとされ、近くのことしか想定できなければ、未来の広がりがないとされ、未来の広がりには縦幅によってとらえることが定石とされる。しかし、大学生の未来展望をとらえる上では、前述したような未来展望の横幅の広がりとして、未来に対する視野の広がりも未来展望の広がりとしてとらえることが必要であると考え。この視点に基づき日潟(2015)では、大学生の未来に対する視野の広がりをとらえる項目を作成した。その結果、大学生の未来の視野の広がり、社会的側面として社会に認められることを望む「社会的評価」、他者の幸福を支援することに重きを置く「社会貢献」、個人的側面として自分の心にあることを実現したり、何かを達成することを目指す「自己実現」、自分らしい人生を送ることに重きを置く「自分らしさ」、一生懸命努力する姿勢を示す「自己成長」、加えて、たくさんの人と出会うことを重要とする「他者とのつながり」の6側面があることが示唆された。そこで本研究では大学生の未来の明るさと未来の視野の広がりとの6側面との関連を検討する。

加えて、未来の視野の広がりにより人生に対して積極的な行動が行われるのか、また、それが未来の明るさの判断に関連するのかわかりたい。大学生が未来の明るさと未来に対する視野の広がり直接的に未来の明るさと関連することも予測されるが、未来に対する視野が広がることで、実際にそれに対する行動を行い、それにより未来の視野の広がり間接的に未来の明るさに影響を与えることも予測される。海老根(2010)は就労や経済状況において明るい未来を抱くことが困難な時代となっているが、このような状況下においても無気力な状態に陥らずに、自己の人生に対して積極的な態度を持つ者もいることに焦点をあて、そのような態度を測定する尺度を作成している。この尺度によって大学生の人生に対する積極性を示す態度を多面的にとらえることができ、目標や夢を持つようとしているかや、自分自身を向上させようとしているかなど、未来の視野が広がることによって、実際にその行動を行っているのかわかりたいととらえることができると考えられる。

以上のような視点に基づき、本研究では大学生の未来の視野の広がり人生に対する積極的な態度がどのように未来の明るさと関連しているのかわかりたいことを試みる。また、未来の視野の広がりにはキャリア形成に大きくかわかりたいことが予測される。渡部(2014)は、キャリア形成と時間的展望の関係を探索的にとらえ、キャリア形成が進んでいる者は目標指向性と希望が高いことを示しており、キャリア形成と未来の明るさは大きく関係すると予測される。さらに、未来の視野の広がりには社会的側面と個人的側面、他者とのつながりの3つの側面から構成される。安達(2010)はキャリア探索を行うことに対して、自己への視点と環境への視点、および他者から学ぶという3側面が関連することをとらえている。また、安居(2000)は職業選択には固有な自己(代替できない自己)と社会や組織の中での一人の個人(代替できる自己)との「統合的な自己概念」を形成することが課題であるとしており、未来の視野の広がり未来の明るさの関連から、大学生のキャリア形成における適切な支援のあり方がとらえられると考えられる。そのため、本研究では就職活動をする前の1年生から3年生を対象に調査を行い、キャリア支援の視点を含めて検討する。なお、村上・原・三好(2015)ではキャリア形成の過程が学年によって異なることが報告されていることか

ら、各学年による分析を行う。

2. 方法

(1) 調査時期

2014年11月～2015年1月。

(2) 調査対象者

関西圏の私立大学1校の大学生127名に実施した。回答に欠損値があるものを分析の対象から外した結果、分析対象者は大学生115名(男性59名、女性56、平均年齢19.68歳、 $SD=0.93$)であった。その内訳は1年生37名(男性18名、女性19名、平均年齢18.68歳、 $SD=0.48$)、2年生42名(男性24名、女性18名、平均年齢19.71歳、 $SD=0.46$)、3年生36名(男性17名、女性19名、平均年齢20.67歳、 $SD=0.54$)である。

(3) 実施手続き

授業後に質問紙を配布し、回答は任意であることを伝え、同意を得た者にその場で回答をしてもらい回収した。実施に際して、某大学の研究倫理審査委員会の審査を受けて行った。結果の分析については、統計ソフトSPSS 23.0を使用した。

(4) 調査内容

①未来展望の明るさ

“あなたの未来について”「とても明るい」(7点)から「とても明るくない」(1点)の7件法で実施した。

②未来展望の視野の広がり

Nuttin(1985)のINOM尺度(The Inventory of Motivational Objects)を参考に作成した日潟(2015)の未来の視野の広がりをとらえる58項目を使用した。「あなたの未来を考えたとき、以下の項目について今のあなたはどのように考えていますか?」と教示し、「とても重要」(7点)から「全く重要でない」(1点)の7件法で回答してもらった。各下位因子の合計得点を算出し、項目数で割ったものを下位因子得点とした。下位因子は、「社会的評価(15項目)」「社会貢献(14項目)」「自己実現(11項目)」「自分らしさ(8項目)」「自己成長(5項目)」「他者とのつながり(5項目)」である。

③人生に対する積極的な態度尺度

海老根(2010)が作成した人生に対する積極的な態度尺度(25項目)を使用した。5件法で実施し、点数が高いほど人生に対する積極的な態度を示すように配点した。各下位尺度の合計を項目数で割った得点を尺度得点とした。下位尺度は、「目標・夢を持つとする態度(以下、「目標・夢」とする)(5項目)」「自己を向上させようとする態度(以下、「向上心」とする)(4項目)」「肯定的に捉えようとする態度(以下、「肯定的」とする)(7項目)」「時間を大切にしようとする態度(以下、「時間重視」とする)(6項目)」「自分らしさを重視する態度(以下、自分らしさにおいては、未来の視野の広がりにもあることから、「自分らしさ(積)」とする)(3項目)」である。

④フェイス項目

学年 性別 年齢 今までサークル等の所属の有無 目標としている人の有無など。

3. 結果と考察

人生に対する積極的な態度尺度については既存の尺度であるため信

頼性については検証されているが、未来の視野の広がりについては検証されていないため、クロンバックの信頼係数 α を算出した。「社会的評価」($\alpha=.89$)、「社会貢献」($\alpha=.91$)、「自己実現」($\alpha=.85$)、「自分らしさ」($\alpha=.78$)、「自己成長」($\alpha=.75$)、「他者とのつながり」($\alpha=.62$)であった。「他者とのつながり」についてはやや低い結果となったが、項目には意味のまとまりがあることから、そのまま採用することとする。

(1) 学年別、性別における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度尺度の比較

学年別と男女別の未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の各下位因子の平均値、標準偏差、および、学年と性別による2元配置の分散分析を行った結果をTable 1に示す。以下の3つの因子以外は学年と性別による有意差はみられなかった。未来の視野の広がりにおける「自分らしさ」に性別による主効果がみられ($F(1,109)=3.23, p<.1$), Bonferroniによる主効果の検定を行ったところ、女性の方が男性よりも高い傾向にあった。また、「他者とのつながり」にも性別による主効果がみられ($F(1,109)=4.89, p<.05$), Bonferroniによる主効果の検定を行ったところ、女性よりも男性の方が高かった。人生に対する積極的態度においては「目標・夢」に性別による主効果がみられ($F(1,109)=3.21, p<.1$), Bonferroniによる主効果の検定を行ったところ、男性の方が女性よりも高い傾向にあった。

未来の視野の広がりにおける「自分らしさ」とは、「幸せになること」、「自分自身の人生を生きること」、「のんびり過ごすこと」、「他者によって乱されない人生を送ること」などの項目から構成されており、男性よりも女性の方がより自己の価値観を重視した未来をイメージしていることが示された。また、人生に対する積極的態度においては実際に目標や夢に向かって進もうとしているかどうかという意識について男性の方が女性よりも高い傾向があった。これらのことから、女性は自分らしさを生かしたいという思いが強く、男性はより明確な目標を持ちたいという意識が高いことが示された。下島・有馬(2011)が大学生の未来展望をとらえた研究において、女性は就職に対して結婚や出産などの諸事情を考慮する必要がある、男性よりも就職イメージが明確でないことが示されている。女性は結婚や出産などによって変化が生じることが予測され、将来に具体的な目標を立てるということよりも、どんな形でも自分らしさを活かせることをより重視する志向性が働くことが示唆される。それに対して、男性は「働くこと」は選択の余地がなく(下島・有馬, 2011), 具体的な目標を持って未来を志向しようとする姿勢がみられたと考えられる。未来に対して他者とながっているということが重要とする意識は男性の方が高かった。大学生の自立における男女の差を検討した研究によれば、男性は女性に比べて、社会的関心や社会的視野が高いことが示されている(高坂・戸田, 2005; 大石・松永, 2008)。本研究における「他者とのつながり」は、「社会的な多くの交流をもつこと」や「たくさんの人々に会うこと」のような項目で作成されている。これらは社会に対する関心ととらえることもでき、男性が高くなったとも考えられる。しかし、日湯(2015)においては、同様の因子で女性が高い傾向を示している。大石・松永(2008)においては、女性は協調的対人関係が高いことが示さ

れている。「他者とのつながり」の項目は、他者とうまく関係を保つことととらえるとも、社会に出て、たくさんの人と出会うことととらえることもできる。この点に関しては、今後検討する必要がある。

Table 1 学年別、性別の未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度尺度の平均値、標準偏差(SD)と分散分析の結果

		1年生 (男=18女=19)		2年生 (男=24女=18)		3年生 (男=17女=19)		F値		
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	学年別	性別	交互作用
未来の明るさ	男	4.72	1.67	4.54	2.08	4.06	1.60	0.84	0.01	0.16
	女	4.58	1.50	4.50	0.92	4.32	1.25			
社会的評価	男	4.75	1.29	5.00	0.64	5.06	1.08	0.20	0.24	0.77
	女	4.96	0.92	4.70	0.77	4.89	0.93			
社会貢献	男	5.76	0.76	5.53	0.90	6.05	0.99	2.00	0.59	0.20
	女	5.66	1.05	5.52	0.75	5.79	0.68			
自己実現	男	5.46	0.73	5.35	0.82	5.84	0.90	2.11	1.39	0.48
	女	5.23	0.86	5.37	0.70	5.53	0.74			
自分らしさ	男	5.18	1.16	5.76	0.82	5.87	0.85	1.88	3.69 [†]	2.35
	女	5.91	0.83	6.04	0.51	5.76	0.68		男性<女性	
自己成長	男	5.08	1.27	4.85	1.04	5.53	0.98	2.04	0.62	0.42
	女	5.05	1.22	4.83	0.80	5.12	0.84			
他者とのつながり	男	6.08	0.93	5.65	1.14	5.49	0.89	2.09	4.89 [*]	0.60
	女	5.51	0.87	5.18	0.90	5.37	0.71		女性<男性	
目標・夢	男	4.28	0.50	4.05	0.64	4.16	0.70	0.00	3.21 [†]	1.34
	女	3.84	0.68	4.07	0.50	3.97	0.99		女性<男性	
向上心	男	3.79	0.68	3.75	0.78	3.99	1.14	0.52	0.83	0.01
	女	3.62	0.81	3.63	0.82	3.80	0.65			
肯定的	男	4.13	0.54	4.01	0.65	4.03	0.86	0.42	0.46	0.11
	女	4.02	0.73	3.86	0.77	4.03	0.60			
時間重視	男	3.42	0.47	3.64	0.74	3.50	1.07	0.43	1.69	0.25
	女	3.62	0.63	3.69	0.52	3.76	0.64			
自分らしさ (積)	男	4.20	0.57	4.07	0.82	4.20	0.86	0.42	0.58	0.25
	女	3.98	0.69	4.02	0.53	4.18	0.51			

注. 多重比較は(Bonferroni)を用いた。 $p<.1$, $^{\dagger}p<.05$
F値の下段は多重比較の結果を示す。

(2) 未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の下位因子間の関連

①学年別による未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の下位因子間の関連

学年別未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の下位因子間におけるピアソンの相関係数を算出した。その結果をTable 2に示す。1年生では「社会的評価」、「自己実現」、「自分らしさ」、「自己成長」との間に正の相関がみられ、「社会貢献」と「自己実現」、「自己成長」、「他者とのつながり」との間に正の相関がみられた。また、「自己実現」と「自己成長」、「他者とのつながり」の間にも正の相関がみられた。2年生では「社会的評価」と「自己成長」の間に弱い正の相関がみられ、「社会貢献」と「自己実現」、「自己成長」、「他者とのつながり」との間に正の相関がみられた。また、「自己実現」と「自己成長」、「他者とのつながり」の間には弱い負の相関がみられた。3年生では「社会的評価」と「他者とのつながり」、「自分らしさ」と「自己成長」、「他者とのつながり」以外のすべてに正の相関がみられた。

各学年ともに「社会貢献」と「自己実現」、「自己成長」の間には正の相関がみられており、大学生においては将来自分が社会のために貢献することが重要であると考えている者は、その中で自己実現や自己成長を行おうと考えていることが示唆された。また、「自己実現」と「自己成長」の間にもすべての学年で正の相関がみられていることから、「自己実現」と「自己成長」は同じ方向を向いて意識され、自己実現するためには自分が成長する必要があると考えて

いることが示された。大城・島袋 (1996) が行った高校生を対象とした研究において、個人の時間的展望と社会的展望は相互に関連しながら発達するものであることが示唆されている。浅川 (2008) では自己意識と就職意識の関係として、労働の中で社会貢献を行い、鍛えられながら自己も成長するという発達モデルが得られている。本研究ではそれらの結果を支持するものであると考えられ、青年期には多くの者にそのような意識が育まれていることが示された。

1年生と3年生は自分の未来にとって社会的評価を重要視している者は、「自分実現」や「自分らしさ」、「自己成長」のような自分の力を発揮したいという思いが高いことが示された。しかし、2年生では「社会的評価」と他の下位尺度とはほぼ関連がみられなかった。若林・後藤・鹿内 (1983) が従来の自己概念と職業意識に関する議論をもとに一般的な形で図式化した職業選択過程の構造によれば、職業を決定する過程において、自己概念を確立することが必要であるとされる。村上ら (2015) の研究によれば、1年生は職業選択に理想を抱いている状態であるが、2年生で自己概念の揺らぎがあり、職業選択に葛藤している様子がみられ、3年生には職業に対する理想と現実との折り合いが付き自己効力感が上昇する傾向がみられている。2年生は自己概念の揺らぎにあたるため、このような結果が生じたとも考えられる。

1年生と2年生では「自分らしさ」と「社会貢献」との間には関連がみられておらず、自分らしくあることと社会貢献とが共存するものでないという意識があることが示された。それに対して3年生には中程度の正の相関がみられており、自分らしくあることと社会のためになることがともに重要であることが意識されていた。小川 (2016) によれば、1年生はまだ労働観が重層的な意味を持ち得ていないとされる。そのため、1年生、2年生には関連がみられず、3年生で就職を意識した中で社会貢献としての仕事の中で自分らしさを活かすという重層的な意味を持ち、関連がみられたと考えられる。また、「自分らしさ」と「自己実現」の間に2年生と3年生で中程度の正の相関がみられたことから、学年が上がるとともに、自分らしくいること自体が自己実現につながるという意識が生じていることが示唆される。それに対して、1年生では自分らしさというものがまだ実感されにくいことも予測される。キャリア教育や未来展望の形成においては、過去の振り返りなどを通して自己理解を行うことの重要性が多くの研究で示されている (後藤, 2011; 石川, 2014; 尾島・杉山, 2015; 下島, 2008; 白井, 2010 他)。また、丸山 (2016) は大学で教育プログラムを実施することにより自己理解は上昇することができると示している。したがって、1年生に対して自分らしさに対する気づきを与えるような取り組みを行うことが未来への明るさを生じさせることに有効であると考えられる。

「他者とのつながり」においては、2年生で「自分らしさ」と弱いながらも負の相関がみられていることは興味深い結果である。他者とのつながりが自分の将来にとって大切だと感じている者は、自分らしくあることを重要だと思っていないということであり、自分らしさが重要だと思っている者は他者とのつながりを重視してないということになる。つまり、他者と自己が両立し得ない状況が生じていることがうかがえる。村上ら (2015) の大学生のアイデンティ

ティと職業選択の年次変化をとらえた研究において、2年生には自己効力感が低下し、自己の職業観と修学の現状との間にギャップが生じ、職業選択に葛藤している状況がみられるが、アイデンティティの様態は他学年と比べて低くないことが示されている。自分らしさを追い求めることと社会の中に一員になるということに折り合いをつける前段階にあたる時期であることも予測される。

Table 2 未来の視野の広がりの下位因子の学年別相関

	学年	社会貢献	自己実現	自分らしさ	自己成長	他者とのつながり
社会的評価	1年生	.29	.49**	.58**	.65**	.04
	2年生	.08	.28	.28	.31*	.13
	3年生	.51**	.57**	.70**	.62**	.15
社会貢献	1年生		.64**	.24	.50**	.34*
	2年生		.61**	.13	.44**	.42**
	3年生		.85**	.48**	.58**	.40*
自己実現	1年生			-.11	.62**	.40*
	2年生			.42**	.53**	.30
	3年生			.58**	.62**	.39*
自分らしさ	1年生				.29	-.20
	2年生				.19	-.32*
	3年生				.28	.07
自己成長	1年生					.06
	2年生					.24
	3年生					.24

* $p < .05$, ** $p < .01$

②学年別による人生に対する積極的態度の下位因子間の関連

人生に対する積極的態度の下位因子間におけるピアソンの相関係数を算出した。その結果を Table 3 に示す。1年生ではすべての下位因子間に正の相関がみられた。2年生では「肯定的」と「自分らしさ (積)」との間以外のすべての因子間に正の相関がみられた。3年生でもすべての因子間に正の相関がみられた。海老根 (2010) においても、因子間相関において相互に中程度の相関が得られており、妥当な結果であると考ええる。しかし、2年生にのみ肯定的に捉えようとする態度と自分らしさを重視しようとする態度に関連がみられなかった。前述の村上ら (2015) の研究においても、2年生では自己と社会の狭間で職業選択に葛藤している可能性があることが示されており、キャリア教育の実施は2年次がきわめて重要であるとしている。また、河井・溝上 (2014) が大学生の学習に対する時間的展望をとらえた研究においても、2年次に低下する傾向になり、2年生の学習に関する時間的展望形成への足場かけ支援が十分かつ実質的になっていない可能性を指摘している。未来

Table 3 人生に対する積極的態度尺度の下位因子の学年別の相関

	学年	向上心	肯定的	時間重視	自分らしさ (積)
目標・夢	1年生	.71**	.72**	.39*	.65**
	2年生	.61**	.60**	.56**	.37*
	3年生	.81**	.71**	.79**	.62**
向上心	1年生		.58**	.51**	.61**
	2年生		.67**	.67**	.35*
	3年生		.73**	.81**	.67**
肯定的	1年生			.49**	.49**
	2年生			.42**	.24
	3年生			.81**	.65**
時間重視	1年生				.58**
	2年生				.56**
	3年生				.66**

* $p < .05$, ** $p < .01$

の視野の広がりと同様に、自分らしさを追い求める過程が難しい状況であることが感じられ、それが2年生の課題であると考えられる。相関係数の数値をみると3年生で比較的高く、未来に対する視野の広がりと同様により統合されていることがわかる。

(3) 未来の明るさと未来の視野の広がり、人生に対する積極的態との関連

大学生が何をもとに自分の未来が明るいかな否かを判断しているのかをとらえるために、未来の明るさへの回答と未来の視野の広がり、人生に対する積極的態の各下位尺度間のピアソンの相関係数を学年別に算出した。また、未来の視野の広がりと実際の人生に対する積極的な態との関連をとらえるために両尺度の下位尺度間のピアソンの相関係数も算出した。その結果をTable 4に示す。

①未来の明るさと未来の視野の広がりとの関連

1年生では未来の明るさと未来の視野の広がりには関連が見られなかった。2年生と3年生では未来の明るさと「社会貢献」、「自己実現」、「他者とのつながり」との間に弱い正の相関がみられた。

1年生は自分の未来の明るさは、社会的評価や社会貢献のような社会で活躍する自分や、自己実現や自己成長ができることなどには直接的に関連せず、それらによって未来の明るさを判断していないことが示された。また、1年生は社会に出て生きていくという実感が伴っていないことが予測され、未来の明るさと関連しなかったと考えられる。しかし、2年生と3年生においては、未来に対する視野の広がりの中でも社会貢献や自己実現が重要であるという考えが生じることにより、未来を明るくとらえていることが示された。小川(2016)は大学の低学年ではキャリア教育の入り口として「働くことの意味」を見つめたり理解を深めたりすることが重要であり、高学年では個性重視の視点から、個々人の労働観を尊重した就労支援を行っていくことが必要であるとしている。本研究でも同様の志向の変化が生じていることが示唆された。

さらに、2年生と3年生では、他者との交流を持つことを重要だと考える者は未来を明るい判断していることが示された。金政(2014)は、社会イメージにおける関係性不安が目標指向性や希望に対して間接的ではあるが影響を与えていることを示している。したがって、他者と交流を持つことに喜びを感じられるように社会的なスキルを育成することも大学生が未来を明るくとらえる上で、重要な支援であると考えられる。

②未来の明るさと人生に対する積極的態との関連

各学年とも未来の明るさと「目標・夢」、「肯定的」の間に正の相関がみられた。それに加えて、1年生は「向上心」との間に弱い正の相関がみられた。3年生では未来の明るさと人生に対する積極的態のすべての下位尺度の間に中程度から強い正の相関がみられた。

すべての学年において、目指す目標や夢があることやそれを持つという積極的な態をもっている者や、未来を信じ、自分の可能性を感じて期待を持って生きようとしている者は、自分の未来は明るいこととらえることにつながっていることが示された。都筑(2007)は縦断的研究により自己効力感の高低は、時間的展望のあり方にも影響し、高い自己効力感を持った学生ほど、将来への希望が強く、将来目標も明確で、計画性に富み、空虚感もあまり感じていないこ

とを示している。したがって、自己効力感を高める体験を高等教育でも行いながら、その中で具体的に個人的側面と社会的側面の広がりを持って目標や夢を焦点化していくことにより、未来に対するポジティブな意識が育まれると考えられる。

また、1年生と3年生では自分を向上させようと努力することの中に未来の明るさが実感されることが示された。しかし、Table 1に示すように、「向上心」の得点は他の下位尺度に比べて低い。「向上心」の項目は、「自分が成長するように日々過ごしている」「日々挑戦しようとしている」などの項目で構成される。向上心には1年生と3年生では質的な違いがあると推測されるが、学年に合わせた日々の成長を実感できる体験や課題が学内の正課活動や正課外活動などで行えることにより、未来の明るさを感じていくことができるととらえることもできる。

加えて、3年生では「時間重視」や「自分らしさ(積)」の下位尺度が未来の明るさと関連した。杉山(1994)によれば、未来展望が確立された個人においては、現在とりうる活動のうち、「未来のため」になる活動が選択的に増加し、そうでない利他的・衝動的な活動の相対的な割合が減少する。3年生において未来の明るさを感じる者には、そのような意識が生じ、自己が選択した未来に関連する行動に積極的に従事していけるのではないかと推測される。

③未来の視野の広がりと人生に対する積極的態との関連

1年生は「社会的評価」と人生に対する積極的な態とは関連がみられなかったが、「社会貢献」と「他者とのつながり」と人生に対する積極的態のすべての下位尺度に中程度の正の相関がみられた。「自己実現」との間には「時間重視」を除くすべての下位尺度に弱程度から中程度の正の相関がみられた。2年生においては、「社会的評価」と「目標・夢」の間に弱い正の相関がみられ、「社会貢献」と「目標・夢」、「向上心」、「肯定的」の間に正の相関がみられた。さらに、「自己実現」においてはすべての下位尺度との間に正の相関がみられた。また、「自分らしさ」と「自分らしさ(積)」の間に中程度の相関がみられ、「自己成長」と「目標・夢」、「向上心」、「時間重視」との間に中程度の正の相関がみられた。「他者とのつながり」とは「目標・夢」、「肯定的」の間に正の相関がみられた。3年生では「社会的評価」と「肯定的」、「時間重視」、「自分らしさ(積)」の間に正の相関がみられ、「社会貢献」と「自己実現」においてはすべての下位尺度に中程度の正の相関がみられた。また、「自分らしさ」と「肯定的」、「時間重視」、「自分らしさ(積)」との間、「自己成長」と「目標・夢」、「向上心」、「肯定的」、「自分らしさ(積)」との間に正の相関がみられた。

すべての学年において、「社会貢献」と「自己実現」への視野の広がり、目標や夢に取り組む態や、成長に向けての努力である向上心、人生を楽しみ、未来を信じて生きようとする肯定的な態と関連した。これらは未来の明るさにも関連している。社会貢献の意識や自己の形成については、ボランティア活動の有効性がさまざまな研究で示されている(羽田野, 2014; 猿渡, 2015 他)。木村・川市・大木(2009)はボランティア活動を「外に向かう自己実現」の社会貢献と位置付けている。ボランティア活動をすることによって、それを感じることができれば、社会貢献やその中で自己実現に対する視野の広がりを与えることができると考えられる。また、奥田(2016)は地域に対して愛着を感じている大学生ほど、自ら

の過去・現在・未来に対してポジティブな時間的展望を抱いていることをとらえ、教育プログラムの中に地域というリソースが時間的展望の形成に有効に機能する可能性を示唆している。学校から社会へ、学生から社会人への移行が課題となる大学生において、社会貢献という社会の中で自分の居場所を見つけていくことがキャリア形成の重要な課題である。地域活動やボランティア活動の体験を通じて、それをイメージさせることにより、人生に対する積極的態度が生じ、間接的に未来への明るさを生じさせることが示唆される。

1年生の特徴として、「他者とのつながり」が未来にとって重要であると感じている者は、人生に対する積極的態度を持っていることが示され、1年生にとっては他者との出会いや交流が未来に向けての人生に対する具体的な行動に大きく関連することが示された。鳥袋(2007)によれば、高校生は意味ある他者の存在が仕事のやり方を重視する労働価値観を発達させ、個人的将来目標を形成していくと同時に、社会的評価目標をも形成させ、学習への関心や学習行動がうまく形成される可能性を示唆している。キャリア形成を含めた未来を志向する前段階である1年生にとって、今までの重要な他者との体験をもとに、キャリア形成を行うベースに他者との交流や出会いに喜びを感じ、それが大事だとする姿勢を大学教育によって育むことが重要であると考えられる。

2年生の特徴としては、未来に対して「自己成長」を重視している者は、目標や夢を持ち、向上心を持ちながら、特に今を大切に過ごそうとする人生に対する積極的行動を行っている様子がかがえた。「自己成長」の項目は、「勉学で前進すること」「一生懸命勉強する(働く)こと」などの項目で構成されている。Table 2、Table 3において、2年生は「自分らしさ」の模索期であることがうかがえる。新谷(2014)が時間的展望における大学生の職業に対する意識の変容をとらえ、1、2年生は3、4年生よりも自分が決めている職業が自分の適性に合っているかどうか不安や悩みを抱えていることを示している。村上ら(2015)の研究においても、自分の職業観と現状の学生生活にギャップが生じていることが示されている。また、松浦・神戸(2014)は大学2年生を対象に調査を行い、社会人に必要な力は大学生活における正課活動や正課外活動によって伸ばすことができていることを示している。そのため、2年生は社会への意識よりも学生生活に一生懸命取り組むことに焦点化され、それによって葛藤の状況を打破しようとしていることも推測される。

3年生の特徴としては、社会的な評価の重視と人生に対する積極的態度に関連がみられたことと、自分らしさを重視することや自分の成長を重視する姿勢が、人生に対する積極的態度と関連したことがあげられる。1年生や2年生に比べて、社会で働くという社会に対する視野の広がりとともに、自分らしさが感じ取れ、それを表現することに未来への志向を生み出しているように読み取れる。村上ら(2015)が行った大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化をとらえる調査において、3年生は職業選択とそれに対する自己効力感がともに上昇し、職業に対する理想像と現実との折り合いをつけている姿がみられるとされる。本研究でも未来への視野の広がりにおいて社会的側面と自己側面の両側面の関連がみられ、それらと人生に対する積極的態度が関連したことから、同様の結果が示されたと考えられる。その一方で、人生に対する積極的

態度は大学生の精神的健康と関連することが示されており(海老根, 2010)、未来への視野の広がりか3年次に生じない場合は、理想像と現実との折り合いがつけられず、それにより未来に対する明るさが実感できない状況になることも予測され、精神面でのサポートが必要な状況が生じることも推測できる。

Table 4 未来の明るさ、未来の視野の広がりと人生に対する積極的態度尺度の学年別の相関

	学年	未来の 明るさ	人生に対する積極的態度				
			目標・ 夢	向上心	肯定的	時間 重視	自分らしさ (積)
未来の明るさ	1年生		.45**	.37*	.65**	.25	.18
	2年生		.63**	.27	.46**	.15	-.06
	3年生		.73**	.62**	.58**	.70**	.49**
社会的 評価	1年生	-.03	.00	.00	.14	.23	.31
	2年生	.19	.32*	.25	.25	.28	.12
	3年生	-.02	.29	.25	.56**	.40*	.38*
社会貢献	1年生	.22	.47**	.45**	.43**	.40*	.53**
	2年生	.45**	.54**	.39*	.46**	.15	.03
	3年生	.39*	.68**	.66**	.62**	.58**	.63**
自己実現	1年生	.03	.55**	.55**	.33*	.32	.61**
	2年生	.38*	.79**	.60**	.53**	.44**	.36*
	3年生	.39*	.66**	.64**	.64**	.60**	.37**
自分 らしさ	1年生	.13	.04	-.17	.32	.18	.13
	2年生	-.08	.24	.07	.06	.21	.49**
	3年生	.10	.28	.21	.47**	.38*	.44**
自己成長	1年生	.22	.20	.16	.18	.16	.26
	2年生	.12	.52**	.45**	.23	.45**	.23
	3年生	.11	.46**	.37*	.51**	.31	.52**
他者との つながり	1年生	.27	.57**	.57**	.45**	.56**	.50**
	2年生	.40**	.37*	.26	.42**	.12	-.14
	3年生	.42*	.46**	.43**	.41*	.38*	.33*

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. まとめと今後の課題

本研究では、大学生が何を視点に未来の明るさを判断しているのかを学年別の未来に対する視野の広がりや人生に対する積極的態度との関連の様相からとらえ、キャリア形成に対する支援のあり方を検討した。

1年生は未来の視野の広がりか直接的に未来の明るさに関係せず、人生に対する積極的態度としての目標や夢、期待、向上心によって未来の明るさを判断していることが示された。2年生では、未来の視野の広がりとしての社会貢献の視点や自己実現、他者とのつながりが未来の明るさを直接的に予測する要因となることが示唆された。しかし、人生に対する積極的態度は他学年に比べて未来の明るさと関連があまりみられなかった。未来に対する視野の広がりから実際への行動へと変化させていくことが必要な時期であると考えられた。3年生は、未来の視野の広がりか2年生と同様の傾向がみられたが、さらに、人生に対する積極的態度が生じているか否かが未来の明るさに関連することが示された。

キャリア形成の視点からとらえると、1年生においては職業選択を行う上での自己理解を深め、社会的な視野の広がりとして、他者との交流や出会いに喜びを感じ、それが大事だとする姿勢を大学教育によって育むことが重要であると考えられた。2年生には自己概念の揺らぎがあり、職業選択という現実からやや逃避する傾向にあることが推測された。2年生においては、未来を社会的側面と個人的側面、他者とのつながりから視野を広げてとらえることの支援を行うとともに、それらを現在と接続していく力を養う必要が

あることが示唆された。3年生では社会で自分の個性をいかす道を見出している姿がみられたが、それができない場合には精神的健康が損なわれることが推測された。

以上のような結果が得られたが、調査対象者の人数が少ないことや、1大学の1学部の結果であり、そのまま一般化することはできないと考えられる。今後、人数を増やし、本研究で得られた結果に対するパスモデルを作成し、因果関係をとらえる必要がある。それにより、各学年に対する未来の明るさを高める要因をとらえ、適切な支援の方向性を見出すことが可能になると考えられる。

引用参考文献

- 安達智子 (2010). キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81 (2), 132-139.
- 浅川和幸 (2008). 高校生の就職意識と自己意識－時間的展望の異なる二つの類型について－ 北海道大学大学院教育学研究紀要, 105, 1-28.
- 海老根理絵 (2010). 青年期における人生に対する積極的態度に関する研究 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50, 149-158.
- 後藤宗理 (2011). 青年心理学からみたキャリア教育 相山人間学研究: 相山人間学研究センター年誌, 7, 56-65.
- 半澤礼之・坂井敬子 (2005). 大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応－自己不一致理論の観点から－ 進路指導研究紀要, 23 (2), 1-9.
- 羽田野慶子 (2014). 若者と地域活動－福井市における大学生のまちづくり活動の事例から－ 東京大学社会科学研究, 65, 97-116.
- 日潟淳子 (2014). 大学生の自己の未来展望に対する評価についての判断要因の検討 近大姫路大学教育学部紀要, 7, 167-174.
- 日潟淳子 (2015). 大学生の未来展望の視野の広がりとその関連要因の検討 近大姫路大学教育学部紀要, 8, 109-114.
- 石川茜恵 (2014). 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴－時間的展望における過去・現在・未来の関連発達心理学研究, 25 (2), 142-150.
- 金政祐司 (2014). 自己ならびに他者への信念や期待が社会へのイメージと将来への時間的展望に及ぼす影響 社会心理学研究, 30 (2), 108-120.
- 河井 亨・溝上慎一 (2014). 大学生の学習に関する時間的展望－学生の学習とキャリア形成の関係構造－ 大学教育学会誌, 36 (1), 133-142.
- 木村早苗・川市幸代・大木桃代 (2009). ボランティア活動による精神的満足度の検討 文教大学生生活科学研究, 31, 85-94.
- 高坂康雄・戸田弘二 (2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)－青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響－ 北海道教育大学紀要(教育科学編), 55 (2), 77-85.
- Lewin, K. (1954). 『時間的展望とモラル』 末永俊郎, 訳. 東京創元社 ((Lewin, K. (1942) Time perspective and moral. New York: Houghton Mifflin.)
- 丸山実子 (2016). 高等学校・大学におけるライフキャリア教育の実践 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 8, 67-75.
- 松浦美晴・神戸康弘 (2014). 「社会人に必要な力」を大学生活の中で育成することを学生はどうとらえているか 山陽学園大学山陽論叢, 21, 131-145.
- 村上竜馬・原千恵子・三好一英 (2015). 大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化: アンケート調査結果の分析 東京福祉大学・大学院紀要, 1, 39-46.
- 内閣府青少年企画 (2013). 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 内閣府
- Nuttin, J. (1985). *Future Time Perspective and Motivation: Theory and Research Method* Leuven: Leuven University Press
- 小川邦治 (2016). 大学生のとしての「働くことの意味」に関する探索的研究 西南学院大学人間科学論集, 11 (2), 69-82.
- 奥田雄一郎 (2016). 大学生の地域愛着と時間的展望 共愛学園前橋国際大学論集, 16, 157-164.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態: 自立尺度の作成－ 日本家政学会誌, 59 (7), 461-469.
- 大城琴恵・鳥袋恒男 (1996). 高校生の目的意識のクラスター分析－時間的展望と社会的展望からの考察－ 琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 4, 59-65.
- 尾島重明・杉山佳菜子 (2015). キャリア教育をどう進めるかⅡ－大学生レポートによる小学校期の回想と評価－ 太成学院大学紀要, 17, 27-37.
- リクルート就職みらい研究所 (2013). 大学生の将来イメージ編－大学生価値意識調査(2012)より－ 株式会社 リクルートキャリア コーポレート戦略総括部 広報グループ <http://data.recruitcareer.co.jp/research/2013/04/post-b9fd.html> (2016年9月12日)
- リクルート就職みらい研究所 (2016). 大学生の実態調査2016－大学生の将来イメージ編－ 株式会社 リクルートキャリア 広報部 <http://data.recruitcareer.co.jp/research/2016/02/2016-68ec-1.html> (2016年9月12日)
- 猿渡 壮 (2015). ボランティア活動への参加をもたらしもの 同志社大学社会学会評論・社会科学, 114, 35-51.
- 鳥袋恒男 (2007). 高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 70, 55-68.
- 下島裕美 (2008). 自伝的記憶と時間的展望(特集 自己と記憶) 心理学評論, 51 (1), 8-19.
- 下島裕美・有馬明恵 (2011). 現代大学生の未来展望－5年後10年後の自分－ 杏林大学研究報告教養部門, 28, 1-9.
- 新谷 裕 (2014). 時間的展望にみる大学生の職業に対する意識の変容 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要, 7, 1-15.
- 白井利明 (2010). 過去をくぐって未来を構想しキャリア形成を促す回想展望法の開発と活用－心理検査との併用と世代間継承の考察－ 大阪教育大学紀要(第IV部門 教育科学), 59 (1), 97-113.
- 杉山 成 (1994). 青年期における未来展望と適応－期待理論によるアプローチ 立教大学心理学科研究年報, 37, 65-75.
- 都筑 学 (2007). 大学生の進路選択と時間的展望－縦断的調査にもとづく検討 ナカニシヤ出版

- 安居哲也 (2000). 青年期社会化の研究 (2) - 自己概念の形成過程の分析 - 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 52, 169-170.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983). 職業レディネスと職業選択の構造: 保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連 名古屋大学教育学部紀要, 30, 63-98.
- 渡部昌平 (2014). キャリアの形成と時間的展望との関係に関する探索的研究 産業カウンセリング研究, 16 (1), 27-31.